

山桜の里 戸赤

旅行情報誌「じゃらん流」

「旅行商品」の聞き取り調査

豊富なメニューと常駐態勢をつくりたい

「やまざくら」に



十一月十日、広告事業者「じゃらん」の伊藤さんへ村の事情や将来展望などを説明

県への企画提案に要望
 観光町づくりの補助事業候補になったことにより、事業推進の窓口である『じゃらんリサーチセンターの伊藤さん』の聞き取り調査が行われ、戸赤の村おこしにかかわっているメンバーから右のような課題と要望が出されました。今後県に提出する企画提案書に取り上げられるかどうか、じゃらん社内で検討されることになりました。

やまざくら常駐態勢をつくりたい
 観光客の受け入れ態勢をどう作るか。一番いいのは、やまざくら学校に常駐できる人を確保すること。そのためにはある程度の人件費を払える体制を作ること。指定管理のなかでこれができるか。またうまくいくとすれば、人件費をあてにしなくてもやる人が見つからないか。
来る側受ける側協働方式で
 今回の情報発信のテーマは、この戸赤で楽しむ人と、楽しませる人とのかきねをなくした取り組みのスタイルが必要で、人手がなくて運営が危機に瀕している村の実態を訴え、来る側と受ける側双方が協働で地域を再興する方策に乗り出すことではないか。
体験メニューは豊富
 中核となる人ができれば、体験メニューの構築は二十一年の経験と教訓から多彩に組み立てて発展させることができる。体験受け入れは、実戦の積み上げが豊富にあるので、きめ細かな案内を載せることができる。
村外から新しい力も
 村のみならずには、村外から協力してくれる移住者を受け入れられるかよく説明し、理解を得る必要があるのではないか。

【木地の学習No.61】しかし、かたいハガネほど刃がかけやすい。しかも速い回転力に耐えきれず、カンナは一日で切れ味が悪くなってしまふ。そこで一日の仕事が終わると、カンナを焼き直して明日の仕事に備えた。また、作中に刃が折れた時に備えて、二、三本の予備のカンナは用意しておいた。カンナの刃先は、半年ほどですり減ってしまうから、またハガネの棒を切って伸ばし、刃先を取りつける。そこで木地屋は、鍛冶の技術をみにつけていなければならず、木地道具の中には、フイゴ、カナシキ、カナツチ、砥石、ヒバサミ、スミカキダシボウ、などの鍛冶道具が含まれる。生地業の展開 手引きロクロの時代は、明治末から大正初期にかけて終わりを告げ、大正時代は水力ロクロにとって代わる。そして昭和十年ごろから電力ロクロが現れ、木地碗の製作工程は大きく変化する。水力ロクロの時代は、まだアラカタ取りの段階までは木地屋が行った。山で取ったアラカタは、里に近い木地工場まで運び、そこで仕上げるようになる。しかし電力ロクロが導入されると、アラカタもロクロ挽きでするようになり、山中で働いていた木地屋は里に降りてきて、木地工場の職人として働くか炭焼きに従事した。この地方の山で木地屋が姿を消したのは、昭和十六年ごろであった。(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (続)

やまざくら学校 避難訓練

収穫祭

冬期間は原則的に閉鎖するものの、避難訓練を行った山桜学校 H27. 11. 15



ちょっといっぴく
 【6.26花植作業のとき】

雪降る前の気ぜわしい仕事をすっかり済ませた十一月十五日、今年の祭をねぎらい収穫祭が行われました。送迎の車も心配され、手打ちそば、汁、オードブルで話が広がります。

ねきのひとコマ

井戸沢下流側にさしかかっている工事



室井正司さん《渡部利男さんが撮ってくれました。次号に続く》



川が変わる

りました。この日は中山間事業の水路の草刈り、集会所・学校の冬囲い、また、今年二回目の学校の避難訓練も行われました。欠席者の事情と適切な出足の取り扱いに話題も及びました。

(ストーリー性のある村づくりのために[No.29] 磨石(すりいし)・石皿 砂岩や安山岩製で表面がざらざらとした河原石で作られる楕円形の石器で、石皿とセットで食物を磨り潰す際に用いられる。湯野上・栗林・萩原・御霊平など多くの遺跡で出土しており、凹石と共に南会津の縄文の遺跡では出土量が多い。石皿は南会津の数多くの遺跡で出土しているが、田島小塩遺跡での発掘調査では脚付きの石皿が出土している。凹石 磨石同様に手で握れる程度の河原石にくぼみをつけた石器で、古くは火起こしの道具とされていた。町内の湯野上・栗林・萩原・御霊平など南会津の縄文遺跡からは大量に出土しており、古川利意氏の指摘のように表裏の穴には規則性があるように思われる。柔らかいものや軽石製のものがあり、粉食生産用具としての使用だけとするには疑問が残る。 石錘(せきすい)・土錘・浮子 石製の錘(おもり)で、紐をかけるための溝が縦或いは縦横に刻まれる。南会津では縄文後期以降の遺跡での出土が多い。田村三省の研究を継承した会津藩士岸五郎並光の「増削・会津石譜」(弘化年間頃成立)には、猪苗代蟹沢の遺跡の石錘を図示してこれらを古代の人々の使用した漁網の錘であることを記している。後期の五百地・原両遺跡から出土しており、田島上和田原遺跡・岩下遺跡からも出土している。「下郷町史-第7巻通史編(発行・下郷町)」より出典(続く)